

## [019]生活体験学習研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/4763160>

---

出版情報：生活体験学習研究. 19, 2019-07-31. 日本生活体験学習学会  
バージョン：  
権利関係：



【歴代会長の挨拶】

## 日本生活体験学習学会に参加して

—「生活が教育する」(Das Leben bildet)—

山 崎 清 男\*

初代会長横山正幸先生（現福岡教育大学名誉教授）、第2代会長南里悦史先生（現九州大学名誉教授）の後を受け2014年から2017年までの4年間、第3代会長を引き受けさせていただいた。横山先生、南里先生は生活体験に関する学問的業績も豊富な一流の研究者であり、また生活体験に関する実践的活動にも指導的立場で参加されていた。このような先生方の後の「会長」は、大変なものだと思いながらお引き受けした。

会長として就任した際、両先生のお考えを念頭に置きながら、日本生活体験学習学会のいっそうの「活性化」を任期中の目標とした。具体的には、会員を増やすことと研究大会等の学会活動の充実である。会員数を増やすことは、学会の認知度を高めることにもつながると考えたからである。また特に教育関係者に広く学会活動を知っていただくことも、学会の存在をアピールする重要な契機である。会長就任時の目標がどれだけ実行できたか、はなはだ疑問である。ほとんど目標を達成できなかった。私の力量不足である。しかしまがりなりにも会長として学会運営をすることが出来たのは、事務局担当者をはじめとする会員の皆様のご支援をいただくことができたからである。今になって、反省することは多い。

ところで「生活体験学習」は古くて新しい課題である。いうまでもなく、教育の原型は親子（家族）間のかかわりの中に見出すことができるといえよう。言い換えるなら親と共に日常の生活を過ごす中で、親の姿を見て子どもは生きる術（すべ）、生活する術を学習していったと考えられる。つまり生活する中でさまざまな術を学習していったのである。か

つてスイスの教育者ペスタロッチが「生活が教育する」(Das Leben bildet)といったが、まさにこのことを意味していると思われる。人間（子ども）は、生活する中でさまざまな影響を受け、いろいろな術を身につけて育つのである。

かつてイギリスの哲学者ギルバート・ライルは「知」の形式として「命題知」と「経験知」を論じた。たとえば、学校は短時間で多くのことを多数の子どもに教授することができる。これは教える内容を言葉に置き換える、すなわち教える内容を言語化することによって可能になる。また成果も言語で評価可能である。つまり数値化できる知識の教育といえよう。このような知の形式が命題知である。

ところが、言葉（言語）での表現が困難な知の形式も存在する。たとえば「職人のワザ」、「ベテランのカンやコツ」、そして「社会性」といわれるものなどは言語化することによる修得は極めて困難である。このような、言葉での表現が困難な知を「経験知」と表現することができる。「経験知」は、人間（子ども）の健全な成長発達にとって重要なものである。このような知を獲得する機会は、大人（地域社会）が提供すべきものであろう。ジョン・デューイ等が提唱した「生活経験カリキュラム」の検討を含め、「生活が教育する」という意味内容を再度考えることが今日われわれに与えられた大きな課題である。特に自己中心的であり社会規範の獲得が不十分、自己抑制力の未熟さなどが批判される現代の青少年にとって、体験活動を通しての言語化が困難な「知」の獲得は重要事項であるといえよう。

「生きる力」の重要性が指摘されて久しいが、知識獲得のみに力点が置かれる教育が展開されると「生

\*2014～2017年の学会長、大分大学名誉教授、教職大学院特任教授

きて働かない学力」という結果を生み出すことになろう。もちろん、知識の獲得は重要である。しかし体験に媒介された知の重要性を見落とすと、「生きて働かない学力」という結果に陥るであろうことに

十分注意すべきである。

この20年間の活動をふまえ、特に子どもの健全な成長発達を支援するために日本生活体験学習学会がいつそう発展することを心より願っている。